

と宣言する福音のメッセージは、人類の崇高な努力と期待に沿うものとして現代に新たな光を輝かすのである」(77)と述べ、次いで平和の本質を定義する。「平和は単に戦争がないことでもなければ、敵対する力の均衡を保持することでもなく、独裁的な支配から生じるものでもない」「平和とは、つねにより完全な正義を求めて人間が実行に移さなければならない秩序の成果である」「平和は永久的に獲得されたものではなく、たえず建設されるべきものである」「他人および他国民と、また彼らの尊厳を尊重する確固たる意志および兄弟愛の積極的な実践は、平和建設のために絶対必要である。こうして平和は、正義がもたらしうるものを超える愛の実りでもある」(78)。全面戦争の断罪を表明し、軍拡競争を警告し、「神の摂理は、われわれがつねに戦争に訴えるという古い悪習を断ち切ることを切に求めている」(81)と述べている。

聖ヨハネ二十三世 平和の教皇

監督: Giorgio Capitani

音楽: Marco Frisina

脚本: Giancarlo Zizola / Francesco Scandamaglia / Massimo Cerofolini

製作: Luca Bernabei / Ferdinand Dohna / Anselmo Parrinello

CAST

アンジェロ・ロンカッリ (教皇聖ヨハネ二十三世)	Ed Asner
アンジェロ・ロンカッリ (神父-大司教時代)	Massimo Ghini
アルフレド・オッタヴィアーニ (枢機卿)	Claude Rich
ドメニコ・タルディーニ (大司教、のちに枢機卿)	Michael Mendl
ラディニ・テデスキ (ベルガモの司教・恩師)	Franco Interlenghi
ヨシフ・スリビイ (ウクライナの司教)	Giacomo Piperno
アンジェロ・デ・ラックワ (大司教・ロンカッリの友人)	Roberto Accornero
モーリス・フェルティン (フランスの枢機卿)	Jacques Sernas
ロリス・カボヴィラ (ベニス時代からの秘書)	Paolo Gasparini
ガイド・グッソ (アシスタント)	Ivan Bacchi
フルンチョフの娘	Sydney Rome
アンジェロの母	Tosca D'Aquino
ローザ (ランカの労働者)	Anna Valle
アンジェロ・ロンカッリ (子供時代)	Mauro Rapagnani

©2016カロール日本語字幕DVD製作委員会

禁無断複写 (コピー)・複製・転載

<http://www.karoldvd-jc.org/>

JOHN XXIII

感動の長編三部作ついに登場!!

聖ヨハネ二十三世 平和の教皇



列聖
記念

教皇フランシスコによる列聖!! 2014年
第二バチカン公会議閉幕50周年!! 2015年

全キリスト教会の統一を目指し 400年ぶりに

第二バチカン公会議を実現した 平和の教皇

「カロール教皇になった男」に続く、話題作「ヨハネ二十三世 平和の教皇」日本語字幕版ついに完成!
2014年4月同時に列聖された二人の教皇、ヨハネ・パウロ二世、ヨハネ二十三世の平和の呼びかけに、
今こそ世界中が耳を傾け共に祈るとき

主演: エド・アズナー 監督: ジョルジョ・カピターニ

日本語字幕製作: カロール日本語字幕 DVD 製作委員会
<http://www.karoldvd-jc.org/>

推薦: 高見三朗 カトリック長崎大司教

SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)

後援: 上智大学

めく、1958年10月28日、11回目の投票で77歳のロンカッリ枢機卿が選ばれました。まさに神の摂理でした。

第二部では、教皇としての短い、しかし大変内容の濃い働きが語られます。新教皇は次の教皇までの“橋渡し役”に過ぎないなどと陰口をたたく人たちもいたそうです。しかし、即位3カ月後に、公会議開催を公表されたのです。教皇に選ばれるまでの経歴は一見華々しく見えますが、実際には第二次世界大戦もあり、さまざまな貴重な体験を積み上げた年月でした。そのおかげで、そして聖霊の照らしを受けた結果、カトリック教会が、自らを刷新し、世界の中で福音を告げ知らせ、人々に奉仕するためには、公会議を開くことが必要だという確信を得られたのです。1962年12月に最初の会期を終え、翌年4月11日最後の回勅『地上の平和 — パーチェム・イン・テリス』を發布した後、御父のもとへ帰られました。この聖なる教皇が教会に与えた対話と平和の道筋を、後継者の福者パウロ六世教皇、聖ヨハネ・パウロ二世教皇、そして現教皇が継承し発展させています。

聖ヨハネ二十三世 — 平和をあきらめなかった教皇

法政大学総長 田中 優子



教皇様は、世界で10億人とも言われるカトリック教徒の頂点に立つ。そのひとりであった教皇ヨハネ二十三世は、世界についての理想をもっていた。それは「平和」である。

教皇在職の時代は、歴史上未曾有の悲劇となった第二次世界大戦は終結したものの、東西の冷戦が続く、キューバ海域は、人類の存亡さえも危うくする核戦争の一触即発の危機にあった。

核でこの世界が消え去るのか否か。キューバ危機の際、その危機を回避できたのは、この教皇の力も大いに働いたという。改めて、カトリックの頂点であるだけでなく、世界を変える力をもつ重要な存在であることを認識さ

せられた。それにしてもこの映画の、世界破滅の危機に近づく緊迫感には、手に汗を握った。

教皇様はバチカンという国家のいわば大統領のようなもので、カトリック教徒にとってはもっとも神様に近い存在…と私たちは思いがちである。教皇ヨハネ二十三世も、「教皇が指をパチンとならせば、みな従うと思っていた」が、全くそうではなかったと語っている。二千年の伝統を守り通してきた宗教界の中で保守勢力に囲まれながら、時代に即しつつ理想に向かって重要な役割を果たしていくことの、いかに困難なことか。しかし、教皇はあきらめなかった。

教皇は殺人犯や重罪犯の刑務所に赴き、彼らに言葉を与えた。ソ連とソビエト人を非難しようとする枢機卿たちに、非難ではなく対話を提案した。暴力に対して非暴力を提示した。そして戦争を回避し平和を実現するために「教会は人の心に語る言葉を発明しなければならない」と、400年ぶりに、第二バチカン公会議を招集したのである。これはカトリックの刷新のみならず、すべてのキリスト教会の一致を目指す歴史の大きな転換点だった。それは、この教皇様が生涯をかけた目的、つまり「平和」のためであった。

平和の実現者として2014年に教皇ヨハネ・パウロ二世と共に列聖されたこの教皇様は、前教皇ピオ十二世の逝去の後、コンクラーベ（教皇選挙）で、なかなか後継者の決まらない中、高齢でおそらく在位期間も短く、次の候補者に橋渡しするだけの「中継ぎ教皇」として選ばれた。そのあたりの駆け引きもなかなか面白い。

ところが、保守的な枢機卿たちの期待をことごとく裏切り、短い5年という在位期間の間に、ひたすら「平和」を訴え、そのためにあらゆることを刷新した。DVD『カロール』で見ると、空飛ぶ聖座といわれ、日本にも来られ熱い感動を与えた教皇聖ヨハネ・パウロ二世という偉大な教皇様がのちに誕生したのも、この第二バチカン公会議という刷新あつてのことだったと今納得できる。

ジュゼッペ・ロンカッリが教皇ヨハネ二十三世になるまで、彼は戦争という現実と向き合い、自らのやり方を通した。それこそが第二バチカン公会議に結実したのである。全編を通して、平和への絶え間ない努力こそが真に危機を救うのだ、という「意志」が伝わってくる。今こそ必要な映画である。